孫への提言

私の戦場体験記

海原会会員

多田野　弘

私の戦場体験記は、昭和十八年七月、南太平洋の激戦地ラバウルから始まっている。二十三歳だった。連日、百機を超す戦爆連合の敵機の来襲を迎えて、二百機余いた我が戦闘機隊は迎撃撃退していた。私はゼロ戦の整備下士官として勇躍戦闘に従事していた。来襲のあるたびに、滑走路の傍に設けた土盛りの防空壕に退避したが、Ｂ２４爆撃機が投下する一トン爆弾には効果が無く犠牲者が出た。やがて、我が方は人員・機材共に損傷していったが、米軍は日増しに戦力を増強し、戦況は次第に悪化していった。このままでは死を迎えるときが近いと、一兵士である私にも感じられた。

夜が来るたびに、どんな死に方をすべきかを考えるようになった。ある夜、心の奥から「祖国や家族の平和のために一命を捨てることは、男子の本懐ではないか、喜んで前から撃たれて死ね」という声が聞こえてきた。あっさり死を覚悟することができた。すると忽ち、死への恐怖は消え去り、心は青天のように晴れ渡ったのを覚えている。

昭和十九年一月、彼我の戦力の差が大きくなり、戦線の縮小を余儀なくされ、我が戦闘機隊は全員サイパンに移動することになった。その内私たち二百五十名余は、二隻の貨物船に便乗して行くことになっていた。当時ラバウルは、既に空も海も米軍の勢力下に移っており、出港した船が無事に着いたためしがないほど緊迫していた。

さあ困った、船が沈めばどうやって死ねばよいのだろうかと思案する中、ふと或る考えが閃いた。水中を深く潜っていくと、水圧で失神して死ねることを思いついた。苦しまずに死ねる方法を思いついた私は泥のように眠ってしまった。

案の定、出港の翌日コンソリー爆撃機が一機飛来して爆弾投下され、僚船羽黒丸が直撃で舳先を上にして目の前で沈んでいったが、我が海河丸は幸運にも至近弾であった。しかし、安心したのも束の間、翌日、我が船が魚雷を受け、私は轟音と共に吹き飛ばされた。だがどこも傷ついていなかった。機関が無事だったのか船は進んでいたが、二発目が来るのは必至とみて、何も考えずデッキから海に飛び込んだ。太平洋の波は巨大だったが、死ぬのは未だ早すぎる悠々と浮かんでいた。何時の間に来たのか、味方の駆逐艦に救助され、潜る必要はなくサイパンに着いた。両日の戦死者は三十五名であった。

サイパンでは、忘れもしない昭和十九年二月十九日、米五十八機動部隊によって壊滅されたトラック島へ進出の命を受けた。私は数名の部下と一式陸攻（双発爆撃機）に便乗し、ゼロ戦二十数機と共に向かった。一式陸攻は速力が遅く、弾が当たるとすぐに燃えるので一式ライターと呼ばれていた。トラック島に着く前に、グラマン戦闘機に食われてしまうだろうと思い、いい死に場所を与えられたと勇んで機中の人となった。

私は、機の前部にある機銃席で、目を皿にして敵機を見張っていた。トラック島の上空に敵機は一機もいなかった。私たちが出払ったサイパン島が今、猛烈な空襲下にあるという。数日後サイパンに帰着すると、「お前は運のいいやつだなぁ」と羨ましがられた。三月初旬、我が戦闘機隊はサイパン基地を撤収し、全員航空母艦千代田でペリリュー島に移動した。

ところが、三月三十日、ペリリュー島は米５８機動部隊に包囲され、二日間、連日空襲を受け、我が戦闘機隊は迎撃に飛び立った。だが、初日の戦闘で全機を失い、翌日、グアム・テニアン両島の基地から応援に飛来したゼロ戦五十二機も、夕刻までに全機南溟に消えた。両日の戦死者二百四十六名を数えた。その間私たち整備員は、邀撃戦で弾や燃料を使い果たして降りてくる機に、それらを補給してまた飛び立たせる任務であった。其の度に私は「いくぞ！」と叫

んで壕を飛び出し、「滑走路が俺の死に場所だ」と思って、降りてきた機に向かって駆けて行った。上を見るとグラマンの編隊がこちらを目掛けて突っ込んできた。もう滑走路上に伏せるしかない。同時に、ダ、ダ、ダと弾がコンクリートにはじける音が耳をつんざいた。体がもっと細ければと思った。

立ち上がってみると、数人の部下がついてきていたのを知ったが、誰も傷した者はいない。続いて次の銃撃が来ぬ間にと駆け出した。皆オリンピック並みの早さだった。部下は滑走路に身を晒すと、空から狙い撃ちされるのを知りながら、誰一人としてひるむ者はいなかった。彼らは皆ラバウル以来の歴戦の勇士だった上、私の率先垂範が彼らを死地に突入させたのだと思う。

やがて、戦闘機がいない防御力を失った島は、いつ敵前上陸されても不思議ではなかった。三十一日夜、総員集合が令され、中野司令から、「米軍上陸の公算大なり、我が隊は最後の一兵まで戦う」と訓示があった。私たちは僅かな武器で海岸線に布陣して敵の上陸を待った。この砂浜が俺の死に場所だと観念した。

これまでラバウル・サイパンで何度も死に目に遭いながら、よくぞ生きてこられたものだ、もう年貢を納めてもいいと思うようになっていた。しかし、又もや予想に反して、ペリリュー島は翌日から、波の音しか聞こえない穏やかな日が続いた。

我が二〇一航空隊は急遽、フィリピンのセブ島に移動することになった。私は特命により、ゼロ戦を中島飛行機製作所で受領して、セブ基地に空輸せよと出張を命ぜられた。パラオ基地に隠していた二式大艇（四発水上飛行艇）に便乗し、内地に向かって飛んだ。

玉砕が予想された島から八時間経った頃、「日本に着いたぞ」の声で、機上から見た房総半島の桜に涙が止まらなかった。生きて二度と見ることはないと思っていた祖国日本に帰ることができたのである。その嬉しさは到底言葉にすることができない。

中島飛行機製作所で受領したゼロ戦は、一旦木更津基地に集合することになっていた。今だから言えるが、私は陸路移動すべきを、顔見知りのラバウル以来の搭乗員に頼み、ゼロ戦の胴体に潜り込んで木更津まで飛んでもらった。受領したゼロ戦数十機とともに、先導する一式陸攻に乗って、沖縄・台湾を経由しセブ基地に着いた。ところが、二〇一空本隊は、ペリリュー島からセブ基地に向かったジョクジャ丸が、魚雷を受けて沈んだことを知らされた。私は、出張のお陰で、再び太平洋で泳がずにすんだ。

セブ基地では、九月十二日、敵機動部隊の奇襲を受け、私たちが日本から空輸した新鋭のゼロ戦七十機が餌食にされてしまった。二〇一空本隊はルソン島マバラカット基地に移動することになり、私は一式陸攻で行った。同基地では十月二十五日、世界史にも残る、戦闘機に二百五十キロ爆弾を抱かせて、機もろともに敵艦に突っ込む特別攻撃隊を、日本で初めて我が隊から出すことになった。当日、大西滝次郎司令長官と水杯を交わした特攻隊員が、操縦席から我々に手を振って出撃して往くのを、「総員、帽ふれ」で見送った。

機上の彼らの顔は、晴れ晴れとして、しかも凛として輝いてみえた。もうこれは人間業ではない、神の化身ではないかと見紛うばかりだった。私と同じ若者が、祖国の危機を救わんと、進んで命を捧げようとする姿に、震えるような感動を覚えた。私も彼らと共にフィリピンの土になろうと心に誓った。

昭和二十年一月、私は最後の戦場となったフィリピン・マバラカット基地にいた。温存していたゼロ戦は、すべて特攻として出撃し、戦闘機が一機もいない状態に立ち至った。そのような中で、傷ついたゼロ戦を一機でも飛ばそうと夜通しで修理していた。そのとき、上司から呼び出され、「今夜零時、近くのクラーク基地出発のダグラスＤＣⅢ輸送機で、茨城県の神之池基地へ行け」と告げられた。一瞬、夢ではないかと思った。当時の戦況から見ても、自分の死が、

そう遠い先ではないと諦めていた矢先だった。また日本へ帰れるという嬉しさもあったが、武器を持たない多くの隊員を基地に残したままである。命令とはいえ、自分の帰国に、後ろめたい気持ちがいつまでも残った。残存していたゼロ戦搭乗員と共に、ダグラス機でバシー海峡を越え、台湾・沖縄経由で日本に帰り着いた。当時、フィリピン・クラーク基地には毎日一機、双発の輸送機が日本から飛んできていたが、主として軍の高級幹部が日本との連絡に使用していた。その定員は十五名程度、帰国したい将兵が山ほどいたのに、私ごとき一下士官を便乗させてくれたのが、今も不思議に思えるのである。憶測だが、多分私の三年余の戦場における、死を賭しての働きの褒賞として、配慮してくれたとしか考えられなかった。赴任した神之池航空基地は、世界史上でも希な、ロケット推進の人間爆弾「桜花」を扱う、七二一航空隊の戦闘機隊、三〇六飛行隊だった。富高基地に移動した我が戦闘機隊が、「桜花」を抱いて出撃する一式陸攻の護衛として出発するのを見送った。だが、一式陸攻が鈍足のため撃墜され、「桜花」は咲かないまま散った。そのうち、広島・長崎の原爆禍があり、続いて終戦となった。

私の三年余の戦場体験は終わりを告げたが、同時にそれは、戦後に生きる私の人生を決定づけるものとなった。何度も捨てたはずの命が、ここに生きているのは、神が生かしてくれたのだと思わずにはいられなかった。ならば生かされたこの命を、世に役立たせることが、その恩に報いる唯一の道である。という考えが揺るぎないものとなり、強い自信となって、百歳になった私の人生をつくってくれたといえる。

私が命を捨てて闘ってきたのは、国の平和と家族の平安のためだった。この体験記を、孫たちに託す平和の願いとしたい。

（終わり）

筆者の多田野弘氏は、昭和十四年十月航空整備科予備練習生として横須賀航空隊に入隊されました。昭和十六年十月応召により、谷田部航空隊に入隊、日米開戦後は、マーシャル群島ルオット基地、ラバウル基地、ニューアイルランド島・カビエン基地、竹島基地、セブ基地、ルソン島マバラカット基地、神之池基地など第一戦で活躍されました。昭和十九年一月には、乗船中の海河丸が敵潜水艦の魚雷攻撃で沈没、漂流後駆逐艦に救助されるなどまさに歴戦の強者でした。昭和十九年十月には、我が国最初の特別攻撃隊である神風特攻隊敷島隊の出撃を見送るなど、いまとなっては歴史的な出来事の生き証人でもあられます。

同氏は百歳を越えた現在もお元気で、株式会社タダノ（本社香川県高松市）の顧問をやっておられます。

縁があって海原会の会員となられ、多大のご支援をいただいております。このたび、「航海日誌」と題して同社のホームページに掲載されております人生訓の一文を紹介させていただきました。

（事務局）